

巻頭言

院長 亀山元信

仙台市立病院医学雑誌第33巻が刊行されることになりました。原著2編、症例報告8編、コメディカルレポート3編、その他2012年に発行された著書・論文リスト、学会発表、院内剖検記録、救命救急センター症例検討会一覧、CPC記録、各科カンファレンス記録が掲載されています。当院における昨年1年間の学術的活動の集約と言ってよいでしょう。

過去20年の本誌表紙目次を通覧してみると、掲載論文数が最近数年間とみに少なくなっているのが目につきます。この要因として様々なことが考えられます。1) 診療に関わる業務量の増大。入院診療計画書に始まり、DPC登録、診療経過説明書、各種検査・手術の説明・同意書、各種診断書、インシデントレポート、退院時サマリー、等々、以前に比べて書類の量が圧倒的に増加したことは間違いのない事実です。さらに、EBMやガイドラインに基づいた患者・家族への丁寧な説明が医療安全の見地からも必然となってきたことから、以前にも増して時間が必要となっています。2) 医療情報の飛躍的増加。各種検査機器・技術の進歩により、検査項目数が多数の領域で増加し、また各種画像診断法の分解能向上に伴い情報量も幾何級数的に増大し、これらの医療情報を実際の治療に投影するプロセスが以前より煩雑化していることも事実です。以上2つのポイントのみを取り上げても臨床の現場が毎年多忙となっていることは容易に理解できます。さらに研修医の論文作成という観点からは、3) 臨床研修制度の変遷があります。以前は内科、外科、小児科のストレート研修が当院の臨床研修スタイルでしたが、2004年に導入された新医師臨床研修制度の必修化に伴ってローテート研修が主体となり、研修医が特定の指導医と接する期間が明らかに短縮しました。さらに2012年からは従来の内科系、外科系、小児科系の枠が撤廃され、一本化されたプログラムでの臨床研修となったため、さらに研修期間が細分化されるようになりました。研修医に対する論文作成指導という見地からは不利に作用していることは否めないのが現状です。

しかし、若手の先生方にとって論文作成、特にまず症例報告執筆の重要性はここで改めて強調しておきたいと思います。価値ある症例報告は凡百の研究論文よりもはるかに高く評価され、中には世紀を超えてなお引用されるものもあり、臨床医学の発展に大きな貢献をなすものです。医学の進歩発展は少数のパイオニアによってのみ達成されるものではなく、無数の人々の小さな努力の集積の上にあると信じています。

多忙な日常診療業務の中で、論文を執筆・投稿された方々、そして指導に当たられた方々、さらに編集作業にあられた編集委員長の長沼先生をはじめ編集委員の先生方のご尽力に深謝申し上げます。